

中世禅宗寺院

越前善応寺について(一)

池田 正 男

はじめに

中世の越前で曹洞宗宏智派寺院として福井の安居の弘祥寺とともに隆盛であった善応寺についてスポットを当ててみたい。

一章 曹洞宗宏智派の日本、越前への進出
曹洞宗宏智派わんしの概略と、宏智派の日本及び越前への進出の過程についての概略を記す。

中世には武家の力を背景として禅宗が勢力を大いに延ばした。しかし鎌倉の中期、執権北条貞時は鎌倉禅林が臨済一色であることを憂い、鎌倉禅林に新風を吹き込むことを目論み、中国(元)より曹洞宗の東明慧日を招いた。これ以前、既に道元は曹洞宗を持ち帰り永平寺を営んでいたが、黙照禅(公案なしで、ただ只管打坐に励む)を純粹に守ろうと、

池田 中世禅宗寺院越前善応寺について(一)

政界との関わりを否定していたため、五山禅林とは隔絶した存在となっていた。一方、宏智派は同じ曹洞宗でありながら考案を用いず只管打坐に励む曹洞宗本流とは禅風を異にし、臨済禅のごとく公案を重んじた。折りしも中国では曹洞宗がふるわなくなりつつあり、日本に新天地を求めたことも背景にあった。そして東明慧日は鎌倉五山の円覚寺、建長寺の住職を歴任し、関東禅林の宏智派の拠点となる白雲庵を円覚寺内に開いた。こうした時期に別源円旨は中国に渡り曹洞禅を学び、帰国後は東明らとともに五山禅林に宏智派の勢力を高めていった。しかし、あえなく北条氏が滅びたために、宏智派は最大の外護者を失い、一頓挫した。こうした時期に別源は出身地である越前での勢力を高めようとして、室町幕府管領及び越前守護の斯波氏あるいは被管の朝倉氏らに接近をはかり、まず福井の安居に弘祥寺を創立し、ついで今南西郡に善応寺を、さらに所在不明の吉祥寺を創立した。そして斯波氏の力を背景として、京都五山の建仁寺の入寺を果たした。また建仁寺に宏智派の拠点となる洞春庵を開いた。そして善応寺に可休亭などを建て、善応寺を落ち着き先と決めていたが、建仁寺の住持在職のまま示寂した。この病中に足利義詮は使を遣わして慰問すると共に弘祥寺を諸山位に登らせた。こうして越前において弘祥寺と善応寺は曹洞宗宏智派の重要な拠点として位置付けられることとなった。その後、別源円旨の法嗣玉岡如金は善応寺を中興し、建仁寺の住持となると共に当寺に新豊庵を興した。また善応寺を拡充すると共に準甲利(準諸山)位を得ている。その後、朝倉氏の力を背景として宏智派は大いに栄え、弘祥寺は十刹、善応寺は諸山の寺格を得た。また既に述べたように宏智派は公案を重んじたため臨済禅と遜色が無くなった。また経済活動にたけると共に、政治や文芸面で大いに活躍した。しかし宏智派は朝倉氏の依存の度合いが強かったため、朝倉氏の滅亡と共におよそ二五十年栄えた宏智派も衰退した。そして善応寺も消滅し、弘祥寺は存続したものの、朝倉色は一掃され、臨済宗派に肩代わりされたものと考えられる。中央の宏智派の拠点である京都建仁寺の洞春、新豊庵は朝倉の滅亡と共に庇護者を失い急速に没落し

た。また鎌倉の拠点である円覚寺の白雲庵は江戸期まで続いたようであるが臨済宗派に併合されていった模様である。

*この記述は多くの碩学の著書を参考にさせて頂いた。

『中世禅宗史の研究』 今枝愛真著、

『日本歴史新書 五山文学』、

『日本の禅語録 8 五山詩僧』、

『五山禅僧伝記集成』、以上玉村竹二著、

『中世禅者の軌跡 中巖円月』 蔭木英雄著、

二章 善応寺の創立から発展の過程

まず善応寺の創立からみてみる。『東海一漚集』に「洞春庵別源禅師定光塔銘」がある。

(上略) 康永元年、帰越足羽県、朝倉金

吾、開弘祥寺基、為第一世、住未幾、赴

鎮西寿勝請、明年、巻席帰弘祥、亦有信

士、扱善応吉祥一寺、請師為開山、(下略)

このように善応寺の開創は康永二年頃で、開山は別源円旨であるが檀越は不明である。

当時は朝倉氏はまだ勢力が弱く越前の北部に勢力を付けつつある時であり、弘祥寺の檀越となったものの、善応寺の檀越とは成りえないと考えられる。善応寺の檀越は斯波氏、も

しくは甲斐氏であったろうか。次に所在地をみてみる。『蔭涼軒日録』の延徳元年十一月十八日の条には御教書の文面が載せられている。

越前国今南西郡瑞聖山善応寺事、可為諸山列之状如件。

延徳元年十一月十二日

準三宮

新豊庵

よって善応寺は今南西郡にあり、山号は瑞聖山であったことが判るが所在地は不明である。また『莊園志料』の越前の未勘郡の大積保には

阿波那賀郡鮎川村八幡松尾両社、大般若

経四百五十巻奥書きに曰く。執筆越前州

三東郡大積之保、東方善応寺住呂宗雄悪

筆、云々。

至徳元年極月

とある。大積の保は所在不明である。大積の保は大塩之保の誤記とも考えられる

が、善応寺の所在地である今南西郡は大塩保よりみれば北東に位置しており大積之保の東方にはあたらない。また大塩保は南条郡従都部郷であるから、三東郡は説明がつかない。

三東郡を東条郡即ち今立郡と同義とみて大積之保は今立郡の旧国高村か北日野村あたりに存在したとみれば説明がつく。即ち、丹生郡の南部を分け南条郡(南仲条郡とも言う)とし、東部を分け東条郡(今立郡と同義)とした。またこの東条郡を今南西、今南東、今北東の三郡に分けた。よってこの三東郡とは東条郡を三つに分けた後の総称として、私的に用いられたのではないかも知れられる。

善応寺は今南西郡にあったことは明白であり、三東郡が東条郡であるなら大積之保は今南西郡にあることになり(東条郡の西部が今南西郡だから)、善応寺は今南西郡の東部にあったことになると考えられる。

なお今南西郡の区域はおよそ西限が日野川、南限が日野山、東限が武衛山の北端と三里山の南端を結ぶ線、北限が下新庄、横越、長泉寺あたりである。

以上みてきたように善応寺の所在地はかなり絞られつつあるが、残念ながらこの特定は今後の課題としたい。

次に寺格をみてみる。『幻雲稿』には

春岳東主座住越之前州善応山門有序

越州路瑞聖山善応禪寺

山門 茲審

吾山一百年前、定光師祖創業之地而本貫也、師戢化之後、大檀越天山相公命の嗣

玉岡老人、整頓叢規、凡寺之所宜有者大備矣、雖然未齒于諸山、頗似為歎焉、延得己酉冬、准三宮喜山相公特降鈞命、陞

位于甲利、盖天山遺愛也、(下略)

定光は別源の塔名であり、天山は足利義満であり、喜山は足利義政である。また『月舟和尚語録』の「月舟和尚住越前州瑞聖山善応禪寺語録」には

提綱

(上略) 昔吾山創洪基者、定光古仏別源也、定光所美、塔曰洞雲、一日登可休亭、以賦唐律七言、空華一関相共追和、至今詩坂尚有畷痕、叢林盛事、既垂不刊、定光的嗣清華祖、種徳長蘭子蘭孫、咸謂真福慧僧、屢承勝定相公外護恩、相公降命以吾山準甲利、兩序作列似一對鴛、五十年之後、常德相公承勝定遺意陞其位齒于甲利、(下略)

さらに『月舟和尚語録』の「八住東山語録」

池田 中世禪宗寺院越前善応寺について(一)

には

前住当山大成和尚入祖堂

(上略) 超越曩時四十五歳、值善応中興開基玉岡和尚一百年忌辰、(下略)

勝定は足利義持であり、常德は義尚である。先の資料の記述と後の資料とでは大檀越名に少し食い違いが認められるがここでは気にとめないでおく。また善応寺が延徳元年に諸山

(甲利)となる五十余年も前に準甲利(準諸山)になっているが、これは別源の法嗣である玉岡如金の活躍によるものであり、前掲の資料では善応寺中興の祖とある。

次に寺の規模をみてみる。再び『月舟和尚語録』によれば

月舟和尚住越前州瑞聖山善応禪寺語録

山門

指門、善応諸方所、驟歩、大道透長安、顧視左右、遊人不入普門境、唯作青山緑水看、喝一喝、從這裏入。

仏殿

這秋日仏、百億釈迦、看々、霜葉紅拾二

月花。

堯舜梵釈、一身多身、不見道、生為明帝、沒為明神。

祖師、祖堂有洞山、無臨濟。

指列祖、滿堂百千祖師、欠濟北小厠児、(中略)

拋室

土地

拋此室者、天下英雄、何故、騎他人馬、挽他人弓。(下略)

また『幻雲詩稿第二』には

次東林禪翁賀善応仏殿落成之韵 隨身宮殿已完全、法社中興豈偶然、箇々若修無漏定、一荖草上四禪天。(下略)

よって東林如春の存命中に(東林の示寂は延徳三年二月二十五日である)善応寺の仏殿が落成したものと考えられる。既に述べたように諸山となつたのは延徳元年であるが、諸山となるには所定の格式を持つ必要があるから、仏殿を持たなかつたこと(有力な檀越を有し得なかつたこと)が長く準諸山に留まっていた理由ではあるまいか。そして諸山になつた頃の規模は山門、仏殿、祖師堂、拋室、茶亭(可休亭)などがあつたことが判る。

『若越郷土研究』(福井県郷土誌懇談会)

ここで『中世禅宗史の研究』^{*}から引用すれば「幕府から公帖を受けて官寺の最下位である諸山に出世し、次いで諸山、十刹、五山と進むのであるが、新命住持は着任して、まず入寺式を行なう。この入寺儀式に大衆の前で述べる法語を入寺法語という。まず山門に入り、次いで仏殿、土地堂、祖師堂と進み、その間、各伽藍で焼香礼拝して法語を述べ、ついに住持の扱所である方丈に入り、扱室の法語を述べる。さらに仏殿に赴いて、幕府などの公帖に対して法語を述べ、山門疏、諸山疏、道旧疏、江湖疏、同門疏など、入山に対して諸方から送られた疏に対して、一々これを香に拈じて謝意を述べる。」と更に続くのであるが、割愛する。「月舟和尚住越前州瑞聖山善応禅寺語録」には入山式が概ね前述の通りに執り行なわれた様子が記録されている。

また前掲の提綱に「両序作列似一对駕」とあるように、善応寺の体制面の拡充整備が徐々に行なわれてきたものと考えられる。即ち両序とは東班と西班に分け、西班は宗旨修業の方面を担当し、東班は寺院の経営面を担当した。諸山としての格式を維持してゆくた

めに組織化を名実ともに成し遂げ、寺僧の修業の場として多くの僧が巣立ってゆき、また寺院の経済力に力を付け、ひいては祇園社領杉前三ヶ村などの領地経営の請負など経済活動にも進出したものと考えられる。

これは五章の『善応寺に関わる禅僧』及び、七章の『善応寺と祇園社領杉前三ヶ村』で詳説する。

*1 『五山文学新集』 第四卷 所収

*2 史籍刊行会、昭和29年発行 第三卷

*3 『莊園志料』(清水正健編) 下巻

第十一編 越前国 未勘郡

*4 福井県史 絵図 編慶長越前国国絵図

*5 『統群書類従』 第十三輯上 文筆部

*6 東大資料編纂所本複写 建仁寺歳写本

*7 『統群書類従』 第十三輯上 文筆部

*8 『月舟和尚住越前州瑞聖山善応禅寺語録』の『前任当山後住建長東林和尚入

祖堂』に東林の履歴が記されている。

*9 第四節 中世禅林における住持制度の

諸問題 「はしがき」の項